

## 2000年以降韓国における幼児教育課程研究の動向と課題

-研究のアプローチに注目して-

林志妍\*

## An analysis of the academic tendencies and the developmental tasks of Korean curriculum studies in early-childhood education since 2000

-Focusing on approaches to curriculum studies-

Jiyeon LIM

### abstract

The purpose of this study is to inquire the academic tendencies of curriculum studies in Korean early childhood education. This study examines articles in journals, dissertations, and university textbooks published in Korea since 2000. There are three types of approaches to Korean early childhood curriculum studies. The traditional approach is Developmental-Model-Development approach. The main purpose of this approach is to develop a new developmental model or program based on developmental psychology. Reconceptualist approach has been increased since early 2000s in Korea. The main purpose of this approach is to interpret the conventional curricular practices in various terms of modern philosophy. The Ecologist approach appeared in the late 90s is based on ecology and the Korean traditional philosophy. This approach criticizes the idea of human-centrism in early childhood education and insists on change to more nature friendly curriculum. In this study, two tasks are proposed. Firstly, the more curriculum studies should focus on the cultural model, which is an alternative model to the developmental model. Secondly, among the multiple approaches and ideas of curriculum, more common discussions about curriculum should focus on Korea's unique issues.

**Keywords : South Korea, Early childhood curriculum, approach, academic tendencies, developmental tasks**

### 1. はじめに

OECD 報告書 *Starting Strong III*によって保育の質の重要性が強調されて以来、保育の質に対する国際的

---

キーワード：韓国，幼児教育課程，アプローチ，動向，課題

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

な関心が高まってきている。ところで、何を保育の「質」と見るかについては様々な定義が存在するだろうし、世界的にも議論されている<sup>1</sup>。隣国の韓国においてもその現象は見られる。韓国では 2005 年より国家の主導する評価認証制度を導入し、保育の質を積極的に管理するシステムを構築した。さらに、2012 年から 2013 年にかけて「ヌリ課程」を制定し国家水準教育課程を統一した<sup>2</sup>。これは保育の基準を保育カリキュラム・幼児教育課程の次元から定め、それを普及する制度的基盤を構築した試みであった。

一方、2000 年以降韓国内では従来の幼児教育課程<sup>3</sup>に対する批判的な意見が広げられている。このような動きは、幼児教育課程の立場から保育の質を探索することであり、韓国ならではの保育の質向上への取り組みとして、検討する価値があるだろう。

異なる保育方針や理念を主張する立場が、それぞれの独自の幼児教育課程について意見を述べることは、幼児教育課程の発展史上珍しいことではない。だが、最近韓国で見られる研究には、従来の教育課程の形式や研究的な立場を批判しながら、幼児教育課程論自体への観点の転換を要求するものが多い。単に独自の保育観を提示するだけではなく、保育を含む物事に対する認識又はパラダイムの転換を全面に打ち出している。本稿ではこのような総合的な観点を「アプローチ」と見なし、韓国内の研究に見られる多様なアプローチを考察することで、幼児教育課程研究の動向を把握することを目的とした。

「アプローチ」<sup>4</sup>には、研究の方法論だけではなく研究対象に対する認識論が含まれる。また、幼児教育課程に対するアプローチの変化には保育観やあるべき保育像の変化が含まれており、保育の質に対する認識とも関連する。そこで、本研究では韓国内で出版された幼児教育課程に関する研究のうち 2000 年以降のものを中心に考察した。考察においては研究の主題や内容より、カリキュラム研究の意図と研究法、そして、ベースになる学問体系などの研究への見方に注目した。

なお、韓国の幼児教育の動向に関する研究は、最新の政策や法案を紹介するものが多く、その内容においても概観的な報告に留まるものが多かった。さらに、幼児教育課程に注目した研究は比較的少なく、研究対象も国家カリキュラムに限定されていた（勅使、2011；2012；李、2006；林、2010）。その中で、李（2013）は幼児教育課程を含め多数の研究を検討し、韓国内の幼児教育研究全体の動向を鳥瞰させる貴重な資料を提供している。ところが、李の研究は、2006 年から 2012 年までの論文を主題別に分類したものであるため、テーマ別の研究の数やその動向が把握できてもその傾向の背景にある文脈は掴み難い。そこで、本稿は韓国の幼児教育課程の研究におけるアプローチに注目することで、韓国の幼児教育課程の研究の動向を理解する文脈を明らかにしたい。そのために韓国内の研究の具体的なアプローチを全て検討するのではなく、主流の観点とそれに批判的な観点を対応させるようにし、包括的な観点を掴むことを目指す。

## 2. 発達モデル開発アプローチ

### 発達モデル開発アプローチの概念

学校教育課程学者の Yun（2005；2007）は韓国の教育課程学をマクロ的に理解するため「開発モデルアプローチ」という概念を提示したが、この概念は幼児教育課程研究のアプローチとして有効である。Yun（2005）は、今まで韓国の教育課程の研究が、教育課程の設計、開発、適用、評価に必要な実践的・理論的な根拠、即ち「モデル」を提示することを主な目的とした事実に基づき、これらの研究の方法論と認識論を含めて「開発モデルアプローチ」と名づけた。

Yun（2005；2007）によると、このアプローチは 50 年代 Jung（1956）の『教育課程』によって紹介されて以来、韓国において最も広範囲で持続的に影響を与え、今でも教育課程研究をリードするアプローチである。このアプローチは、教育の目標を明確に示し、それを達成する有効で効率的な方法を探索することを教育課程研究の主な課題とする。そして、そのモデル開発は、Tyler（1949）の古典的なモデル又はその修正版の手順に従ってきた。

韓国の幼児教育課程も上述した学校教育課程研究の文脈を大まかに共有し、幼児教育課程研究の主な課

題もモデルの開発・適用・評価にしている<sup>5</sup>。ただし、幼児教育課程のモデルは一般的にプログラム (program) と呼ばれており、それは、米国の発達心理学からの強い影響のためであると言われている (Yang, 2002 ; Lee, 2013)。

韓国では、70年代から米国の多様な幼児教育プログラムが紹介され、80年代には韓国の主要大学附設幼児教育機関を中心に韓国風の幼児教育プログラムの開発が始まった (Kim, 2009)。例えば、海外のプログラムとして紹介されたモンテッソーリ・プログラム、シュタイナー・プログラム、Bank Street プログラム、Kamii-DeVries プログラム等は、幼児教育プログラムの典型として今でも大学の幼児教育課程教材に使用されている (Lee, 2013 ; Kim & Kim, 2000 ; Yang, Choi, & Lee, 2011)。そして、韓国風プログラムとしては、梨花女子大学附属幼稚園の「生活主題中心教育課程」、中央大学附属幼稚園の「活動主義プログラム」、徳成女子大学の「相互作用プログラム」、延世大学校生活教育研究院開放主義プログラムも開発された。これらのプログラムは、韓国の幼児教育の典型的なモデルとして認識されている。特に梨花女子大学附属幼稚園における「生活主題中心教育課程」は、現在の国家水準幼児教育課程のモデルである。

これらのプログラムは、発達心理学の理論を基礎にしながらも、教育目標 - 内容 - 方法 - 評価を明白に区別して提示する Tyler モデルに基づいて開発されている。このような幼児教育課程の特徴について、Lee (1988) は「韓国の幼児教育課程は、発達のモデルと教育工学的モデルが混合する状態である」と指摘している。そこで、韓国の幼児教育課程の従来のアプローチは、学校教育における「開発モデルアプローチ」に対比して、「発達モデル開発アプローチ」と呼んでいいと考えられる。

#### 発達モデル開発アプローチの研究の流れと特徴

韓国において 2000 年代以降においてもプログラム開発は持続的に増加している。以前と比べて幼児の全人的な発達を目指す総合的なプログラムより、最新の理論や現場のニーズに応じた特定の目的に特化されたプログラムの開発が主流である。例えば、数学教育プログラム (Moon, 2013)、創造性を促す絵本を活用した幼児の芸術教育プログラム (Byun, 2004)、自然親和的なプログラム (Chung, 2013)、食生活プログラム (Choi, 2014) など、それぞれのプログラムの目的とする分野は極めて広い。2000 年以降は自然親和的又はエコロジカルなプログラム、韓国の伝統文化を促すプログラム、そして、多文化、栄養と食生活に関するプログラムなどが増加する傾向が見られる。

開発されたプログラムは数えきれないくらい様々であるが、これらを一つのアプローチと見なす理由はプログラムの開発の手順や活動の形式が同様であるからである。Choi (2014) の博士學位論文『味覚教育プログラムの開発と効果』も示すように、ほとんどのプログラムは、Tyler の古典的モデルに Tabá (1962)<sup>6</sup> のモデルを折衝した手順によって開発されている。つまり、まず、先行研究や文献考察を行ない、専門家との協議会及びプログラムに対する要求度調査を行なう。そして、Tyler の手順に従って教育目標、教育内容、教育活動、教授・学習方法、評価の形式を決定する。最後に、効果の検証プロセスを介してプログラムの妥当性を検証する。プログラムは、20～40 分単位の教授学習活動を 10～30 回行なう形で構成される。

さらに、幼児教育プログラムは基本的に教科ではなく子どもの「発達」を促すことを目的とする。この「発達」とは、発達心理学の発達理論から規定され、プログラムの目標や内容、評価や検証の基準として活用される。例えば、Park & Lee (2012) の「物理的な接触遊びプログラムの開発研究と適用効果」の研究においては「自我概念」、「感情的知性」、「親社会的行動」等の概念が、Kim & Kim (2014) の「感性教育プログラム」においては「感性」という概念が目標及び評価の基準になるのである。プログラムの開発においても、ここでは発達心理学に基づいて実証的に定められた概念が使用された。

発達モデル開発アプローチは、子どもの経験を教育の根源と見なす経験主義教育課程をもとにしている。ところで、この「経験」は目的の成就に最も適合的に組織されている。ここには二つの仮定が見られる。

一つは目的中心の思考である。プログラムは、開発の段階から Tyler モデルの手順に沿って教育目的から教育内容、教育方法、評価まで単線的に並べられる。つまり、プログラムや構成活動は最初の段階から「目標」のために働くように設定されている。ここには「手段-目的」の関係があり、教育が手段として考えられる傾向がある。そして、もう一つは、実際の状況や環境がどれだけ複雑であれ、それをうまく分類・組織すれば望む通りにコントロールできるという前提である。必要な条件が全て揃えば理想的な結果が起きる。その条件を組織化したのが教育課程のモデルなのである。ここには、条件を揃えば望む結果がでるという因果論と工学的な思考が強く働いている。

### 発達モデル開発アプローチの課題

発達モデル開発アプローチについてはいくつかの問題点が指摘されるが、それは上述した特徴と関係がある。まず、Yun (2005) は目的中心の性格のもたらす教育的な機能主義の問題を指摘した。教育における機能主義とは「教育という営みは、その活動の期待・予想する望ましい結果を予め設定し、その活動自体はその結果のための手段又は方法として機能すると見なす」考えである (Yun, 2005; 4)。これは、幼児教育課程においても通用し、幼児教育の場合は「期待・予想される望ましい結果」が子どもの発達になる。そして、それぞれのプログラムは、予め設定されたかたちの発達の達成に向かって収束され、その課程において予め定められていない発達における多様な意味は失われる恐れがある。

また、モデルを開発すること自体はあくまでも理論上のものであるため、モデルの実行における理論対実際の乖離の問題が指摘できる。現実には歴史や文化の積み重ねによる独自の文脈があるため、理想的なモデルに現実の文脈をどう反映するかを常に考える必要がある。

最後に、幼児教育課程の理論的な発展の立場からその問題点を指摘できる。発達モデル開発アプローチは、幼児教育課程の研究における最大の目的を「新たなプログラム又は教授・学習活動を次々開発すること」に置いてきた。ところが、モデルの開発と適用に関する研究に比べて、幼児教育や幼児教育課程の内在的な問題や課題、つまり、何を幼児教育の目的にするか、幼児教育課程とは何かということに対する理論的研究は極めて少なかった。その結果、Yun (2005) も述べるようにモデル開発においては 50 年以上に渡って前述の Tyler の古典的なモデルが使われ続け、これという代案のモデルは提案されてこなかった。

## 3. 再概念主義アプローチ

### 韓国における再概念主義アプローチの登場

「再概念主義アプローチ」とは、米国の再概念主義者 (Reconceptualist) の考えを韓国の幼児教育と幼児教育課程研究に適用したものである。再概念主義者は 1970 年代以降、米国で生まれた教育学者達である。彼らは、従来のカリキュラムは「過程-産出モデル」と見なし、産業主義社会と消費社会への適応をはかるシステムとして機能している点を批判した上で、学習者の経験に即してカリキュラムを再定義する運動を展開している (佐藤学, 2013: 107)。韓国の再概念主義者達は、米国の再概念主義者達の本を韓国語に訳して紹介した。彼らは、その趣旨を韓国の幼児教育研究では「教育の効率性と手段的な合理性を中心論理とした実証的なアプローチ (positivistic approach)」が支配的であるため、「今まで明らかにされなかった幼児教育の深層を多様なアプローチと観点を採用して探求したい」からと記している (Sapon-Kessler & Swadener, 1992: 3-4)。

一方、Yang (2000a; 2000b; 2002; 2005) は幼児教育課程理論として再概念主義を韓国に紹介した一人である。彼は、欧米の幼児教育課程の理論体系は、観念主義、経験科学主義、発達主義、再概念主義の 4 つのアプローチによって変遷してきたが、それに対して韓国の幼児教育課程の研究は、80 年代以来、発達心理学に基づいた「発達論的アプローチ」に依存してきたとした。そして、その結果、学校教育課程の分野で論じられてきた様々な議論が、幼児教育課程ではほとんど公論化されず、歴史的にも政治的にも見落

とされてきたと指摘した。そこで、彼は心理学ではなく人文科学と社会科学に基づいて幼児教育課程を探求する再概念主義者達のアプローチが韓国でも必要であると主張した。

要するに、再概念主義的なアプローチとは、既存の幼児教育課程の研究のベースにある観点を新たな視点を取り入れることで批判し問題点を指摘するアプローチである。そして、その新たな観点は、現代の西洋の哲学をベースにすることが多い。再概念主義アプローチの代表的なものには、解釈的アプローチ (interpretive approach)、批判的アプローチ (critical approach)、解体論的アプローチの3つが挙げられる (Kessler & Swadener, 1992)。解釈的なアプローチとは、現象の質的な意味を追求する現象学、解釈学、文化記述研究、ナラティブ研究等を指しており、批判的アプローチとは、教育的現実に含まれている政治的・社会的文脈、階層間の権力の支配イデオロギー等を明らかにするために、社会科学の批判理論を使った研究である。解体論的な観点はポストモダンの視点から既存の教育理論を解体する試みである。

### 再概念主義アプローチの研究とその特徴

再概念主義アプローチの先駆者である米国の教育課程学者の Pinar (1995) は、「カリキュラムの開発」から「カリキュラムの理解」へとカリキュラム研究のパラダイムが転換されていると述べた。この言葉は、再概念主義アプローチの立場をよく表している。つまり、再概念主義アプローチを採用した研究の主な目的は、カリキュラムの多様な側面を理解することにある。

韓国でも、再概念主義の影響により、2000年に入ってから既存の幼児教育と幼児教育課程の意味を新たに解釈し直す試みが増えてきた。これらの研究では、現象学、解釈学、ポストモダニズム、そして批判理論等、多様な学問をベースにした観点が採用され、従来の発達理論と教育工学的なモデルや科学主義を批判し、それに代わり、生活、社会、文化の文脈から子ども達の経験を強調する点が共通している。

Yun (2003 : 9) は、様々な再概念主義アプローチを二つに大別した。一つは、教育的な体験をナラティブ・アプローチで分析し、その意味を個人的・主観的次元から再構成する立場であり、もう一つは、学校教育の政治・経済的な批判を試みるラジカルな立場である。幼児教育課程の研究でも、両者とも見られる。例えば、子どもの森体験における「関係」の意味 (Koh, 2011)、「子どもの生活世界での遊びと思考」の意味 (Son, 2001)、「笑い」の意味 (Lim, Oh, & Cho, 2008)、「教室空間」の意味 (Lim, Yang, & Song, 2012) 等の研究は、現象学と解釈学の立場から子どもや教師達の主観的な経験の意味を解釈しているものである。一方、幼稚園に存在する「優しい子」 (Koh, 2003)、自由遊び (Na, 2002) の研究も、従来では、実践の中であまり注目されなかった子どもの姿を教育課程の構造と関係づけて分析し、問題を提起している。そして、ポストモダニズム的な見方を採用した Kim (2001) や Nah & Kim (2008) は、幼児教育における多様性と多元性を尊重し、相対主義と脱画一化の重要性を強調した。

一方、韓国において美学と芸術に焦点を当てた研究者達は、従来の科学・実証主義に対する批判をするだけではなく、「審美的なアプローチ」という代案を積極的に提示している。Lim & Lee (2008) は、教育課程と芸術の関連性を考察し、「芸術とは、私達の所属する世界にある存在と知を理解するという人間の本質的な側面である」とし、審美的なアプローチこそが、教育課程の意味を人生の意味として位置付ける現代的な代案であると述べた (Lim & Lee, 2008 : 163)。さらに、Park & Lim (2011 ; 2012) と Park (2013) は、審美的アプローチを幼児教育課程として具現化した。彼女達は、科学的合理性が過度に強調された Tyler の線形的・機械的なモデルから脱皮する代案として「人間中心主義・芸術的モデル」を提案した。「人間中心主義・芸術的モデル」とは、「相互力動的な出会いの教育課程」、「芸術的経験としての教育課程」、そして「自己主導的学習者」の3つの視点に基づき、審美的学習経験、倫理的な出会い、芸術的統合活動、審美的な教師、自己主導的幼児という5つの理論原理を持つ幼児教育課程である。彼女達は、このモデルに基づき、審美的幼児教育を実践をする研究を行なった。

## 再概念主義アプローチの限界

再概念主義アプローチは、幼児教育課程の研究において人文科学や社会科学の力を借りて、心理学の実証主義と科学的な認識論を脱皮しようとする試みである。その結果、幼児教育課程の主題や研究法において多元的・学際的になった。ところが、このような傾向には課題点もある。

Yun (2005) と So (1997) は、再概念主義アプローチによる教育課程研究の多元化・多角化の問題を教育学的な立場から指摘した。Yun (2003) は、現代的教育課程研究における多様化は、他学問による教育学の植民地化であると指摘している。彼は、教育課程とは、教育学独自の研究領域であり、教育学ならではの理論体系を持つ分野であり、心理学と人文科学もそれぞれ特有の研究領域と理論体系があると述べている。彼の観点から見ると、様々な学問の観点のお陰で多様な側面から幼児教育を解釈できるようになったが、一方では、幼児教育の本質的な部分まで「多元化」され、幼児教育や幼児教育課程という学問の原点まで失われる危険性もあるという。学問の原点とは、その学問が発展するに当たって皆が同意する出発点であり、議論の核でもある。幼児教育の場合は「子どもを育てる」ことに還元されるだろう。再概念主義アプローチの依存するそれぞれの学問は、子どもや幼児教育をどのように理解すればよいか、どのような方向に子どもを育てて行くべきかという質問までは答えてくれないだろう。

## 4. 生態主義アプローチ

### 生態主義アプローチの登場

「生態主義アプローチ」とは 1990 年代末韓国の幼児教育界に登場し、従来の幼児教育に対する批判的な議論を起した生態幼児教育論に同調する立場である。生態幼児教育論は国立釜山大学附設オリニジップ(日本の保育所に相当)の実践を中心に形成された理論と実践論である<sup>7)</sup>。このアプローチは、子ども又は人間を自然と共存する生態系の一部として見なす「生態学」(ecology) 的な認識論をベースにしており、「自然」と「関係」がこのアプローチにおいてキーワードになる。

生態主義アプローチは、現代の韓国社会と幼児教育に対する二つの問題意識から出発している。一つは人間性の喪失と自然生態系の破壊による人間生存への危機感であり、もう一つは産業文明を背景に発展した幼児教育システムがもたらした子どもの体と心の不健康の問題である。生態幼児教育では、これらの問題の原因は、自然と人間の二元論的な認識論又は人間中心主義的な世界観にあり、その解決法は生態学的世界観への転換の他にはないという意見を示している。

### 生態主義アプローチの研究

Kim (2003) は『生態幼児教育の思想体系と実践原理』のなかで、生態幼児教育の児童観と世界観を示した。彼女はルソー、ペスタルロッツ、デューイなどを基に形成された現代韓国の幼児教育の言説は、児童尊重の幼児教育に正当性を与えたが、自然より人間を最優先に考慮する人間中心の世界観によるものであると指摘した。そして彼女は、韓国の伝統思想の「東学」の考えを借りて、生態幼児教育は子どもと生き物だけでなく、子どもを取り巻くすべての存在を尊重する世界観を元にと述べた。彼女は、既存の幼児教育観では、子どもを成長段階にある存在として助けを必要とする「人間の子ども」として見なしたが、生態幼児教育では、子どもは「固有の能力を持つ自然の一部」、「宇宙的な存在」、「自然の存在」として理解しているとした (Kim, 2003 : 120-121)。

生態主義アプローチの研究は、理論と実践の両面から考えられる。まず、理論的には、韓国の固有の思想や伝統思想、生態学など、従来幼児教育ではあまり扱わなかった学問を積極的に取り入れている点である。例えば、Kim (2003)、Park (2003)、Kim & Lim (2003)、Park & Kim (2004) 等の研究は、生命中心の世界観をベースにした幼児教育の新たな概念を韓国の伝統的思想から掘り出そうとする試みである。特に、これらの研究の中の「子どもは霊的・生命的な存在」、「子どもサリム・生命サリム<sup>8)</sup>」、「モシム

<sup>9)</sup> (Park & Kim, 2004 ; Lim, 2005) 等の概念は、生態幼児教育の子ども観や教育観を明確化し、従来の発達主義と異なる観点を提供している。

そして、実践的な面においては、幼児教育課程の具体的な実践方法を探索している。これらの研究は、多様な「生態幼児教育プログラム」を開発し、その教育的な成果を明らかにする試みである。代表的なものとして、散策プログラム、畑づくりプログラム、歳時風俗プログラム、瞑想プログラム、指先遊びプログラム、節制・節約プログラム、老人・児童相互作用のプログラム、生態食生活教育プログラム、生態アートプログラム、外遊びプログラム等が挙げられる。このような生態幼児教育プログラムの開発・実践には、従来の発達モデルとは異なる特徴が見られる。

### 生態主義アプローチの特徴

生態主義アプローチの独自性は、人間中心の認識を人間と生命中心の認識に転換するという立場にある。幼児教育においてあまり論じられなかった自然の存在を幼児教育の中心に据え、自然を教育の道具として活用するのではなく、自然と共に生きるという文化を幼児教育の観点から提案している。生態幼児教育プログラムにはその特徴がよく現れており、自然にふれる室外の活動、韓国の伝統的な生活文化から掘り出された活動、子どもの自由と遊びを保障する活動、健康な体と生活を促す活動等がある。これらは、実証的に見出された理論に基づいて開発されたプログラムではなく、従来生活の一部として既に存在していた活動をプログラムにしたものである。

Kim, E. (2010 : 113) は生態幼児教育のプログラムを「生態的暮らしモデル」と名付け、従来の「個人の発達・授業モデル」と対比した。「個人発達・授業モデル」は、子どもの発達を「個人内」で完成させようとする活動であり、様々な活動を個人の全人的発達的手段として還元するモデルである。それに対して、「生態的暮らしモデル」とは、子どもが日常生活を送っている中で物事の関係から自然に学びを獲得することを前提している。そこでは、子どもは常に学びに熱意を持っている存在であるという信頼感が前提にある。そして、生態幼児教育の目標は、子ども-他人-自然の良い関係を作ること、つまり良い日常生活を送ること自体に置かれている。例えば、散策も子どもと自然の良い関係づくりがそのまま生活になる活動である。

生態主義アプローチの特徴は、生態的な価値志向、韓国の伝統思想と文化基盤、幼児教育のパラダイムの転換の3点に集約される (Kim & Lim, 2003) 。これらの特徴は、幼児教育における明確な価値志向性を表しており、従来のアプローチにはなかった特徴でもある。つまり、生態主義アプローチは、韓国社会と幼児教育学の抱えている現状に対する明確な問題意識を持っており、「子どもの体・心・靈魂を生かす子どもの幸福な世界」、「自然と人間の共存する生命共同体を実現する」幼児教育を目指している (Lim, 2005 : 262-265) 。そして、その具体的な方法として、韓国人の伝統的な文化と思想から発掘すべきであろうという必要性を強調している。

### 生態主義アプローチの課題

生態主義アプローチの理論的な論理と実践的な根拠を構築することが求められている。生態幼児教育学会会長の Lim (2005 : 447) は、生態幼児教育の理論的・実践的な根拠の不足を指摘し、特に、生態幼児教育プログラムを通して育った子どもに対する実証的研究の必要性を示した。例えば、外遊びや散策を毎日しながら育った子どもの体力を一般プログラムと比較した研究 (Kim, S., 2010) はその試みの一つである。このように、生態幼児教育は子どもの体と心と靈魂の幸福を明らかにしようとする実証的な研究を否定しない。だが、日常生活において徐々に現れる子どもの成長や幼児教育の価値をどのように明白化するか、その具体的な研究方法については未だ積極的に検討されていない。

次に、従来の学問の成果を生態主義アプローチにどのように取り入れて行くかが課題である。Lee (2006)

は、生態主義アプローチに従来の西洋の人文科学の成果を活用することを提案する。彼女は、生態幼児教育の発達観を新たな心理学の流れを用いて明らかにしたり、美学の観点を採用して生態幼児教育課程の実践を解釈したり、ナラティブ教育課程の活用などを提案している。

また、生態主義的な考えをベースにした教育課程理論の枠組みが十分に構築する必要がある。生態幼児教育課程の体系や生態幼児教育プログラムは、工学的な Tyler のモデルを批判しながらも、代案的なモデルを十分に説明していない。Kim, E. (2010) の「生態的暮らしモデル」も基本的な原理を語るだけで、パラダイム転換を提唱しながら、従来の教育課程理論の枠組みを中で活動の内容だけを入れ替えることに留まっている。

## 5. 韓国における幼児教育課程研究の今後の課題

以上、韓国の幼児教育課程研究の動向を発達モデル開発主義、再概念主義、生態主義の三つのアプローチを中心に把握した。主流の発達心理学に基づいた発達モデル開発アプローチは、80 年代から今まで韓国の幼児教育に確かな幼児教育課程のモデルを提示し、幼児教育課程の研究の体系化に貢献したといえる。一方、2000 年代以降登場した再概念主義アプローチは、発達心理学の実証主義と科学主義を批判しながら、人文科学の諸観点に立脚して従来の幼児教育課程を再解釈する新しい試みとして挙げられる。また、1990 年末以降、従来の幼児教育の人間中心主義を批判し、生態学世界観の価値を幼児教育に提示した生態主義アプローチの登場に注目に値する。

後者二つのアプローチは、幼児教育課程の主流のアプローチを批判し、代案を提示しようとする点が共通している。だが、再概念主義アプローチが幼児教育課程の批判と再解釈に集中したのに対し、生態主義アプローチは、明確な価値と方向性を持って、代案的な理念と実践方法を構築することに注力している。そして、この二つのアプローチとも、実証的・工学的な発達モデルにおける脱歴史性、脱文化性、脱地域性の問題を意識し、その代案として歴史と文化、日常生活（生活世界）に注目している。即ち、理論的人為的に統制された環境ではなく、実在する暮らしの中の生きた文脈を重視している。ところが、両者には観点の違いがある。再概念主義アプローチは、文化に注目することを通して、従来の教育課程に潜んでいる権力や矛盾、個人の主観的な経験等を明らかにしようとする。それに対し、生態主義アプローチは、伝統文化や子どもの自然な生活を望ましい幼児教育の姿や方法論であると見なす。つまり、再概念主義者のいう文化とは、既存の産業文明の文化であり、批判の対象である。それに対して、生態主義者のいう生態的な文化とは伝統的社会の文化であり、志向の対象である文化である。

このような文脈を念頭におきながら、韓国の幼児教育課程研究における課題を提示してみる。

まず、韓国の幼児教育課程を「モデルの開発・適用」という枠から、「生活や文化を創造する」ことに転換する研究が必要であると考えられる。韓国の幼児教育課程の研究は、発達モデル開発アプローチに基づき教育目標のために作られた人為的な環境づくりがいわゆる教育課程と見なされてきた。だが、近年新たなアプローチにより、自然な生活や文化が注目されていることが分かる。そこで、今後の韓国の幼児教育課程の研究では、教育課程の枠組みの中で生活や文化という概念を体系化していくことが必要であろう。自然な生活や文化は、「モデルの開発・適用」の単純な論理では説明しきれない、創成・発展・変化していく複雑かつ相互作用的なものだからである。

また、幼児教育課程の研究に対する歴史意識を元にした論議を活性化することも求められる。現代的な教育課程の理論は、多元化と学際的な研究を特徴とする (So, 1997)。このような特徴は、韓国の幼児教育課程の研究にもみられる。無数の異なるプログラムが開発され、様々な学問をベースにした教育課程研究も可能になった。学問の多元化によって、より多くの未知の世界が明白になるだろう。だが、この多元化が幼児教育課程の共通の問題に対する議論を妨げることも考えられる。学問の発展につながる活発な批判的議論は、それぞれ異なる見方から異なるものに注目しているという研究風土では、簡単なことではな



い。研究者達の共通の立ち位置として、歴史意識と問題意識を共有することが必要であろう。そこで、生態主義アプローチの提示する問題意識と価値は、韓国の伝統的な文化や思想の再考を含めた歴史研究が非常に少ない韓国の幼児教育研究の現状において、とても重要な意味を持つと考えられる。今後生態主義アプローチが提起する問題意識を慎重に検討した上で、それを出発点に再概念主義アプローチの豊富な視点をを用いて、幼児教育課程の研究に対する議論を活性化させていくことが期待される。

## 注

<sup>1</sup> 例えば、林悠子（2014）などでは、保育の「質」を巡る国際的な議論が紹介されている。

<sup>2</sup> 「ヌリ課程」とは3～5歳児を対象にした幼稚園の「幼稚園教育課程」とオリニジップ（日本の保育所に相当）の「標準保育課程」を統合した国家水準教育課程である。従来韓国では幼稚園においては「教育課程」、オリニジップにおいては「保育課程」が通用されてきたため、新造語を作って「ヌリ課程」と名づけた。

<sup>3</sup> 保育カリキュラム・幼児教育課程（curriculum of early childhood education）は多様な側面から意味付けられるが、本稿では子ども側から見た「経験」ではなく、保育する側から見た「公式枠組み」又は「保育計画」の意味で使用する。なお、本稿では出来るだけ韓国の方式に従うため、保育・保育カリキュラムという用語より、韓国内で一般に使われている幼児教育・幼児教育課程という用語を使うことにした。

<sup>4</sup> 本稿では、教育課程の研究に対する総合的な見方を示す用語としてアプローチ[approach, 接近方法]を使用した。アプローチとは、特定の学問研究において、何を（what）どのように（how）研究するかに関する考え方であり、研究を導く一種の戦略や指向（orientation）、研究に有用な仮説やアイデアを提供するものである。

<sup>5</sup> 韓国の教育課程研究において最も高い割合を占める分野は、教育課程の設計・開発に関する分野である（Park, Choi, & Sung, 2011）。幼児教育課程研究においても、Choi & Kim（2012）は、2000年から2011年にかけての発表された幼児教育課程に関する学術論文156編のうち、30.8%に当たる48編が「教育課程の設計と開発」に関するものであったと報告した。

<sup>6</sup> Taba（1962）のモデルは、Tylerの古典的なモデルに生徒の要求を診断する段階と教育内容を選定・組織する段階を添加したモデルである。

<sup>7</sup> Kim（2009）は韓国の幼児教育・保育プログラムを代表するプログラムとしてモンテッソーリプログラム、レジョプログラム、プロジェクトプログラム、伝統文化プログラム、そして生態幼児教育プログラムを提示した。生態幼児教育プログラムは、伝統文化プログラムと共に「韓国的な状況で構築されたプログラム」として位置づけられた。さらに、Yun & Lee（2009）による釜山地域における実態調査結果、生態幼児教育プログラムの導入機関が7.85%で、児童中心プログラム57.5%とプロジェクトプログラム17.4%、モンテッソーリプログラム16.42%の次の4位の割合を占めている。

<sup>8</sup> サリム（살림, salim）とは、生命がよく生き、生命を維持できるような行いという意味。対立語は「殺生」。韓国の代表的な生活協同組合であるハンサリムの運動の理念を表す言葉に由来しているが、現在はサリム文明、生命サリム、農村サリム、土サリム、子どもサリムなど、より拡大された意味として使われている。

<sup>9</sup> モシム（모심, mosim）とは、子どもに丁寧に仕える態度という意味の韓国語。

## 参考・参考文献

（日本語文献）

佐藤学（2013）『教育方法学』岩波書店

- 林悠子 (2014) 「保育の『質』の多様な理解から見た『質』向上への課題」『福祉教育開発センター紀要』11, 1-15
- 勅使千鶴 (2012) 「韓国における保育・幼児教育の公共性および質の向上への取り組み：『満 5 歳共通課程』導入の推進計画をめぐって」『日本福祉大学子ども発達学論集』4, 27-46
- 勅使千鶴 (2011) 「韓国の保育・幼児教育の『質の向上』への取り組み」（特集 諸外国の保育-保育の質向上の取り組みと実際）『保育の友』59 (10), 23-25
- 李妍承 (2013) 「韓国幼児教育研究動向の分析：2006～2012」（第 2 部 国際的研究動向）『保育学研究』51 (2), 272-282
- 李河嫣 (2009) 「日本と韓国の国家レベル幼稚園教育課程の比較--教育課程の『ねらい』と『内容』を中心に」『国際教育文化研究』7, 133-144.
- 林志妍 (2010) 「日韓の幼稚園教育のガイドラインに見る『活動』の捉え方の一考察」『人間文化創成科学論叢』13, 189-197
- (韓国語文献) (人名は英語の表記にします)
- Byun, Youn-Hee (2004) 「絵本を活用した幼児芸術教育プログラムが創造性に及ぼす効果及び幼児の創造性開発」『成均館大学校大学院博士学位論文』
- Choi, Ha-Na (2014) 「幼児のための味覚プログラムの開発及び効果」『梨花女子大学校大学院博士学位論文』
- Choi, H., & Kim, J. (2012) 「2000 年～2011 年の学術誌掲載論文を中心に」『幼児教育保育行政研究』16 (4), 115-135
- Chung, Mi-Ra (2013) 「幼児の生命尊重素養を増進するための自然親和的生命尊重教育プログラムの開発及び適用」『幼児教育研究』33 (3), 319-347
- Hwang, Y., & Yang, O. (2002) 「ポストモダニズムの観点からの幼児教育のための含意」『開かれた幼児教育研究』7, 335-355
- Jung, Bum-Mo (1956) 『教育課程』中央教育出版社
- (1976) 『教育と教育学』培英社
- Kim, Eun-Ju (2003) 「生態幼児教育の思想体系及び実践原理研究」『釜山大学校大学院博士学位論文』
- (2010) 「幼稚園教育課程改編，子どもと教師を幸せにする方案であろうか」『韓国生態幼児教育学界 2010 年度春季学術大会資料集』, 108-124
- Kim, E., & Lim, J. (2003) 「生態幼児教育の形成の背景と概念的特性に関する研究」『ヨルリン幼児教育研究』8, 137-158
- Kim, J., & Kim, Y. (2000) 『幼児教育課程』東文社
- Kim, Kyu-Soo (2001) 「ポストモダニズムの幼児教育観考察」『幼児教育研究』21, 161-177
- Kim, M., & Kim, Y. (2014) 「伝統文化に基づいた幼児感性教育プログラムの開発及び効果」『ヨルリン幼児教育研究』19, 393-425
- Kim, Sol-Mi (2010) 「生態幼児教育機関と一般教育機関における幼児の体格・体力及び投薬現況の比較研究」（釜山大学修士学位論文）
- Kim, Young-Ok (2009) 「韓国幼児教育・保育プログラムの動向と課題」『児童教育』18, 55-68
- Koh, Mi-Gyung (2003) 「幼稚園で『優しい子』の成り行き」『中央大学校大学院博士課程論文』
- (2011) 「幼児の森体験で現れた『関係』の現象学的アプローチ」『韓国幼児教育・保育行政研究』15, 225-251
- Kwon, Young-Rak (1997) 「教育課程の理論研究のパラダイムに関する比較考察」『競技大学教育大学院

修士学位論文』

- Lee, Bu-Mi (2006) 「生態幼児教育課程と機械論的パラダイム幼児教育課程の組み合わせの可能性の探索」『生態幼児教育研究』5 (2), 23-46
- Lee, Ki-Sook (2013) 『幼児教育課程第5版』教文社
- Lee, Sook-Hee (2005) 「活動中心の統合教育課程の再照明」『韓国乳幼児保育学』40, 21-46
- Lee, Young-Suk (1988) 「韓国幼児教育課程開発の発展モデルに関する研究」『人文科学』18, 147-174
- Lim, B., Oh, J., & Choi, N. (2008) 「幼児教室で発生する笑いの現象学的研究」『韓国幼児教育・保育行政研究』12, 221-243
- Lim, B., Yang, H., & Choi, N. (2012) 「幼児が経験する教室空間の意味」『ヨルリン幼児教育研究』17, 249-272
- Lim, Jae-Tack (2005) 『生態幼児教育概論』良書院
- Lim, S., & Lee, H. (2008) 「審美的アプローチを通じた幼児教育課程の再概念化」『教育の理論と実践』13 (1), 155-173
- Na, Eun-Suk (2002) 「幼児教育課程の再概念主義的観点からの自由遊び：ポストモダニズムを中心に」『徳成女子大学校大学院修士学位論文』
- Nah, K., & Kim, K. (2008) 「幼稚園での幼児の生活世界の緊張と葛藤の解釈学的理解」『幼児教育研究』21, 85-110
- Min, Jung-A (2013) 「韓国生態幼児教育学の研究動向」『韓国共通大学校大学院修士学位論文』
- Moon, Byung-Hwan (2013) 「数学的な表現を活用した幼児の数学教育プログラムの開発及び効果」『全南大学校大学院博士論文』
- Park, C., & Lee, H. (2012) 「幼児のための身体接触遊びプログラムの開発及び適用効果」『ヨルリン幼児教育研究』17, 325-349
- Park, Hyang-A (1996) 「单元中心幼児教育課程の再照明」『教育理論と実践』6, 71-91
- Park, Hyang-Weon (2013) 「幼児教育課程の審美化のための実行研究」『釜山大学校大学院博士論文』
- Park, H., & Lim, B. (2012) 「審美幼児教育課程開発のための基礎研究」『幼児教育研究』32, 495-524  
 ————— (2011) 「ナラティブに基づいた幼児審美教育の質的事例研究」『子どもメディア研究』11, 49-84
- Park, M., Choi, K., & Sung, Y. (2011) 「教育課程研究の最近の動向分析：2000年以降を中心に」『教育課程研究』29 (4), 25-46
- Park, Young-Shin (2003) 「咸錫憲シアル思想の生態幼児教育含意」『生態幼児教育研究』2, 97-113
- Park, Y., & Kim, E. (2004) 「金芝河生命思想の生態幼児教育含意」『生態幼児教育研究』3, 21-39
- Shin, Og-Soon (2014) 「生態幼児教育の課題：自己の意味探索」『教育論叢』34 (1), 149-162
- So, Kyung-Hee (1997) 「現代の教育課程の理論に対する認識論的考察」『教育課程研究』15, 241-26
- Son, Young-Su (2001) 「幼児の生活世界での遊びや思考の解釈学的理解」『教育人類学研究』4, 103-132
- Yang, Ok-Sueng (2000a) 「再概念論的観点から見た幼児教育課程の探求」『韓国乳幼児保育学』22, 139-170  
 ————— (2000b) 「幼児教育課程の理論：分析的探求」『教育学研究』38, 135-151  
 ————— (2002) 「幼児教育課程の再概念」『教育課程研究』20, 53-73
- Yang, O., Choi, K., & Lee, H. (2011) 『乳幼児教育課程』学志社
- Yun, S., & Lee, Y. (2009) 「幼児教育機関のプログラムと接近法の実態に関する研究」『子どもメディア研究』8, 173-195
- Yun, Byung-Hee (2003) 「教育とサスペンションの理論確立の現状と発展の展望」『社会教育科学研究』7, 1-40

————— (2005) 「教育課程研究教育目的論と教育素材論」『教育課程研究』23,1-36

Kessler, S. A., & Swadener, B. B. (1992). *Reconceptualizing the Early Childhood Curriculum : Beginning the Dialogue*. New York : Teachers College Press. (Shin, O., Yu, H. & Yeom, J. (訳) (2000) 幼児教育課程の再概念化: その会話の開始, 創知社)

(その他)

OECD (2012) *Starting Strong : A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care*, OECD Publishing

Pinar, W. F. (1995) *Understanding curriculum: An introduction to the study of historical and contemporary curriculum discourses*. New York: P. Lang.

Taba, H. (1962) *Curriculum development; theory and practice*. New York : Harcourt, Brace & World.

Tyler, R. W. (1949) *Basic Principles of Curriculum and Instruction*. University Of Chicago Press.

国会図書館ホームページ [http : //www.nanet.go.kr/main.jsp](http://www.nanet.go.kr/main.jsp) (2015.2.28 接続)